

## ジャワ農村における「貧困の共有」の現代的様相

東京農工大学

高橋明善

池野雅文

C. ギアツがジャワ農村理解のために提示した、「貧困の共有」と「アリカルチュラル・インボリューション」の二つのパラダイムは、後に発展途上国を理解するための一般的枠組みと考えられるようになってきた。

しかし、これらは、ジャワ農村において固有の意味を持っていたことを見逃してはならない。東南アジアは基本的に疎人口社会であった。ところが、ジャワには、日本の三分の一の面積に過ぎないにもかかわらず、1990年に1、1億人の人口がひしめいている。前世紀以来の人口増加によって、耕地は今世紀初頭で既に開発しつくされたにもかかわらず、さらに入人口は3倍増しているのである。ギアツのテーゼはジャワ農村において固有の意味をもっていたのである。

ジャワでは他の発展途上国に比して階層分化に乏しく相対的に均質な生活が営まれていた。ギアツはそこに経済的パイを分かちあう「貧困の共有」の論理が貫いていると考えたのであった。また貧困を共有する生活の基礎には、資本投下、新技術の導入、他文化の影響を拒否し、労働力を水稻耕作に際限なく投入することによって、伝統的な水稻耕作を中心とする文化を精緻化しつつ、増加する人口に対応するインボリューションの過程を見出したのであった。

インドネシアは人口抑制、工業化、貿易促進によって経済開発を進めようとしている。日本も発展途上国最大の投資を行なっている。人口増加が加わって、伝統的システムに影響が生じざるを得ない。もともと、アリカルチュラル・インボリューションには行き着く先是「袋小路」ということが含意されている。ジャワ農村の変化は緩慢である。しかし、変化は最深部で進行しつつあるように思われる。ギアツのテーゼが現代の実態にどこまで妥当するか、あるいはジャワ農村は袋小路を脱して「離陸」することができるかを課題として報告したい。

本報告の調査は最初1984年に行なわれたものだが、1989年の追跡調査の結果に基づいている。調査地はジャワでも最も工業化が遅れているが、ギアツによって最も「ジャワ的」といわれた中部ジャワ・ジョクジャカルタ周辺の農村である。内陸部の農村と近郊農村を対象にしたが、前者については同一課題に関して、高橋「ジャワ農村における貧困の共有と家族」として既に発表されている。今回は近郊農村を対象として、内陸部農村と比較しながら課題を検討したい。

追跡調査は黒柳晴夫、柄沢行雄と高橋の3人で行なわれたが、各戸の実態調査は高橋、柄沢の帰国後、黒柳氏の責任で行なわれ、課題は異なるが、黒柳氏の幾つかの報告が既に発表されている。本報告は調査表調査の全貌にかかるものである。